



Title	内田憲男先生追悼号の発刊に寄せて
Author(s)	貴志, 雅之
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99273
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内田憲男先生追悼号の発刊に寄せて

貴志雅之

一昨年8月1日、内田憲男先生が54歳の若さで逝かれて、はや1年半の時が流れました。先生の早すぎたご逝去を悼む思いは、変わることなく私たちの心に刻まれています。この追悼の思いを抱きつつ、法人化を迎え、新たな大学造りに歩みだす今、内田先生がご存命であればと、叶わぬ夢を抱くのは私ひとりではないでしょう。

第一線のロレンス研究者として、常に先端の批評理論とロレンス研究の関わりを熟視した真摯で洞察力に富む先生のお仕事の数々は、文学テクストの力と可能性への限りない探究心、好奇心、そして搖ぎない信頼に貫かれていました。最後のお仕事となった「『文学』から〈文学的なもの〉へ」と題する Peter Widdowson 著 *Literature* の書評の「おわりにかえて」で先生はこう記されています。「テクストの分析を通して……『わたしたちの生を構築している』隠されたプロセスをでき得るかぎりあきらかにする……これが本書から筆者が学んだ文学研究のあるべき姿である」。こう綴られた先生の信念に、人間の生の意味を探る鋭く、温かいまなざしが見えてきます。それが、優れた文学研究者であると同時に、文学をこよなく愛し、人間を愛した内田先生の度量の深い人間的魅力、わたしたちを惹きつけた魅力だったのではないでしょうか。

今あらためて思い起こすと、研究者、教師、同僚、そしてこの上ない友人など、内田先生のさまざまなお姿が脳裏に浮かびます。そのどれをとっても、

学問と教育への情熱、闊達で快活な人柄、信念を貫く不屈の意志、人を思いやり、慈しみ、尊重する真心と優しいまなざしが現れてきます。その内田先生が最後まで車椅子と酸素ボンベで教壇に立ち、愛する外大の学生たちに笑顔で英文学の講義をされたお姿が、学生・同僚を問わず、多くの人々の心を打った記憶が甦ってきます。

内田先生がわたしたちに残された遺産は計り知れません。一つ言えることは、内田先生の生き方、考え方には身近で接した記憶が、新たな研究・教育に取り組んでいくわたしたちの大きな指針となるということです。この追悼号が、内田先生への追悼と敬意、そして先生の遺産を引き継ぐわたしたちの未来に向かう糧となることを信じます。最後に玉稿をご寄稿いただいた内田先生の奥様、内田幸玉先生に英語専攻語教員一同とともに心より御礼申し上げます。

2004年2月

(大阪外国語大学英語専攻語 代表)